

授業実践にみるジェンダー意識と子育て[†]

出沼佳奈子*・金崎芙美子*

宇都宮大学教育学部*

ジェンダーとは社会的・文化的役割としての性のことで、生物学的な性（sex）とは別に考えられるものである。元来日本では、「男は仕事、女は家庭」と社会的にも、文化的にも、教育的にも実践されてきた。しかし、男女平等への動きが活発になった現在では、男女平等な教育を実践されている。そこで、本研究では、授業実践「よりよい家族関係を考えよう」を通して、中学生のジェンダー意識を見るとともに、大学生を対象とした調査をもとに子育て観を分析してみることとした。

その結果、中学生の考える家事分担から、ジェンダー意識が残っていることが明らかになった。また、大学生の子育て観からもジェンダー意識が根強く残っていることが明らかとなった。しかしながら、働いている母親に対しての評価（自分の生き方に自信を持っているか）はそうでない母親よりも高い。

キーワード：ジェンダー、子育て、家事分担、男女平等、家族、母親

1、ジェンダーとは

ジェンダー（gender）とは社会的・文化的役割としての性のことで、生物学的な性（sex）とは別に考えられるものである。「男女の違い」が人間と言うものの本質的な特性であり、自然であり、かえられないものだにとらえる考え方（本質主義）に対し、男女の違いは社会的・文化的につくられたもので、絶対的でも、普遍的でもないにとらえる考えに立つのがジェンダーの視点であり、この考え方が男女平等の根本となる。つまり、性別にと囚われず、一個人としての能力や可能性を見出し、発揮していくことができる社会こそ、真の男女平等の社会といえる。

2、ジェンダーが生む問題

日本では、長く男尊女卑の社会が続いた。日本国憲法で「両性の平等」がうたわれ、現在では男女平等となったはずであった。しかし、一番身近な例として、家庭の家事分担を見てみると、家事を女性が主に行っている家庭は非常に多い。また、子育てにおいては女性は仕事よりも子育てを優先すべきという考えが多い。

日本では、年齢が低い子を持つ女性の労働力率は低くなるが、その反面で、年齢が低い子を持つ女性の就業希望の割合も高くなっている。ここから、本来女性は、就業したいにもかかわらず、ジェンダーの意識から、子育てを優先していることがみてとれる。

3、男女共同参画社会へ

平成11年6月に公布・施行された男女共同参画社会基本法では、男女共同参画社会の形成についての基本理念の一つとして、「家庭生活における活動と他の活動の両立」を掲げている。

[†] Kanako DENUMA*, Fumiko KANESAKI*: Gender and Childcare in Home Economic Classroom

* Faculty of Education, Utsunomiya University

男女共同参画基本計画においても、男女が共に職業生活と家庭生活、地域生活を両立することができる基盤の整備について指摘している。とりわけ、仕事と子育ての両立は男女共同参画社会を実現していく上で極めて重要な課題である。

平成13年6月、男女共同参画会議は、「両立ライフへの職場改革」、「待機児童ゼロ作戦」など5つの柱からなる「仕事と子育ての両立支援策に関する意見」を決定した。これに続いて同年7月に「仕事と子育ての両立支援策の方針について」が閣議決定され、仕事と子育ての両立支援策が推進されている。

4、女性の社会進出

政府は男女雇用機会均等法の制定と引き換えに労働基準法の女性の時間外・休日・深夜労働の規則等を次々改正し、99年に撤廃した。正規女性労働者は「男性並」の長時間過密労働や深夜労働、単身赴任も辞さない働き方を強いられている。一方、今日なお、性別役割分業が根強く残り、家事や育児・介護などの多くの仕事が女性の肩にかかっている状況のもとで、決して少なくない既婚女性がパートへの転換や退職などを余儀なくされている。

総務省統計局「労働力調査」によると女性の年齢階級別労働力は、25～29歳層と45～49歳層を左右のピークとし、30～34歳層をボトムとするM字型カーブを描いており、このM字型カーブから、多くの女性に、家事や育児・介護などの仕事が課せられているとみとれる。

5、家事分担とジェンダー

－中学生の考える家事役割分担－

ここでは、中学3年生を対象に中学生のジェンダー意識を家庭科における「よりよい家族関

係を考えよう」をテーマにした授業でみることにした。

1) 授業の概要

授業実施日：平成18年度9月15日

対象：宇都宮大学附属中学3年1組

題目：よりよい家族関係を考えよう

授業の流れ：教師は身近な生活の課題としてジェンダーがあることを伝え、よりよい生活を営むためにはどのようにしたらよいのかを考えるように促す。その上で、男女で組をつくり、夫婦と仮定して、夫婦の家事分担を考える。夫婦は共働きであり、職業は教師が用意した職業の選択肢から選び（表1）、労働時間などをふまえて、家事分担を考えられるように設定しておいた。

表1 職業例

A 中学校教員 ・土日は休み ・平日労働時間 8:10～18:00(平均) ・部活のため、土日がなくなったり、帰りが遅くなることがしばしばある。
B 会社員 ・土日は休み ・平日労働時間 8:00～16:30
C 医者 ・週休2日 ・平日労働時間 8:30～16:30 ・労働時間は8時間労働が基本だが、患者の求めや必要性により長時間にわたって勤務することも多い。
D 研究職(システムエンジニアなど) ・土日は休み ・平日労働時間 8:00～16:30 ・ただし、残業が多い
E 保育士 ・週休2日 ・平均労働時間 8:00～16:30、9:00～19:00 と日によって、労働時間が変わる。 (保護者の送迎時間の配慮のため)
F 弁護士・税理士 ・税理士の仕事は自由業であるため、サラリーマンのように決まった時間帯に仕事をする必要はない。 ・顧客との打ち合わせなどは、相手の都合に合わせなければならないが、夜遅くなったり、土曜、日曜も休めないことがある。

2) 研究方法

記入したワークシートから夫婦の家事の分担

率を調査し、性別、家事の種類別に比較・分析した。

ワークシート①(記入例)

ワークシート①よりよい家族関係をつくろう！！

年 組

ジェンダーとは社会的・文化的に作られた性差のことです。
・「ジェンダーとジェンダーフリー」について考えを書いてください。

- 社会的地位を女性に与えたり、男性の育児参加を勧めていくべき。固定観念を変えていくべき。(妻)
- 男女平等のほうが学校も楽しくなる。(夫)

・将来の家族の家事分担について考えてみての感想・意見□

- 夫にもっと家事を手伝って欲しい(妻)
- 土曜日がなくなるので、遊ぶ暇がないから、すぐ離婚しそう(夫)

ワークシート②-2(記入例)

家事分担表

仕事	月	火	水	木	金	土	日
掃除		妻		妻			夫
洗濯	妻	妻	妻	妻	夫	妻	夫
食事	妻	妻	妻	妻	妻	夫	夫
ごみ	子	子	子	子	子		

家事分担率

家族	仕事数
妻	12
夫	5
子	5

子 23%
妻 54%
夫 23%

3)結果と考察

① 家事の種類別の比較

ワークシート②-2 において生徒が考えた家事分担を、性別で分担数を集計し、その割合を表した。(表2、図1)

その結果、掃除について見ると、夫(52.0%)と妻(48.0%)の分担率はほぼ同じになっている。これを見る限り、「男は仕事、女は家庭」の意識がなくなったように見えるが、食事の分担率を見ると、妻の72.8%が、夫の27.2%を大きく上回っている。

元来「男子厨房に入らず」と格言されてきた。中国起源のこの格言は、日本では男性の威厳を保つ為、江戸時代以降実践されてきた。今回の中学生の家事分担の結果をみると、その意識が決して過去のものではないことがいえる。

表2 性別×家事分担

分担者	掃除	洗濯	食事
夫	52(52.0%)	62(48.4%)	34(27.2%)
妻	48(48.0%)	65(51.2%)	91(72.8%)

ワークシート②-1(記入例)

ワークシート②家事分担を考えよう！

3年1組()

夫(45歳)	妻(45歳)	子ども(15歳)
職業は？ 中学校教員	職業は？ 保育士	職業は？ 中学3年生
平均労働時間は？ 8:10~18:00	平均労働時間は？ 8:00~16:30 9:00~19:00	平均労働時間は？ 8:30~16:30 土日休み
趣味・習い事 ギターを 習いたい	趣味・習い事 週1でエステに 行きたい	趣味・習い事 塾(月・水・金) 18:00~21:00
主張！ 趣味も絶対大事 にする	主張！ 自分の皿は自分で 洗って	主張！

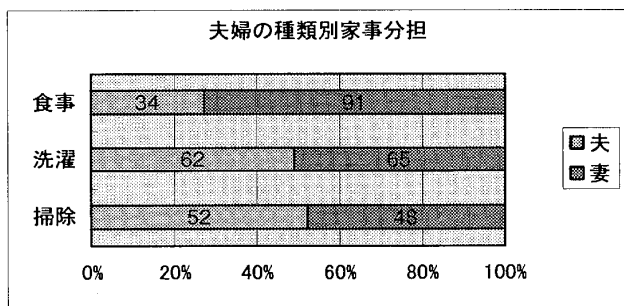


図1 性別×家事分担

②週末と平日の比較

ここでは、ワークシート②-2において生徒が考えた家事分担を、性別で分担数を集計し、さらに、週末と平日に分けて、その分担率を比較した。(図2、3)

その結果、週末の夫の分担率が平日よりも大きくなっていることがわかる。ここから、夫は仕事のない週末に家事をすれば、夫婦の平等な家事分担になると考えていることがいえる。しかし、平日に妻は仕事と家事という2つの仕事を行い、夫は休日に家事をおこなうことが平等な家事分担であるといえるだろうか。「男は仕事、女は家庭」という意識が平日の生活にまだ残っているといえる結果となった。

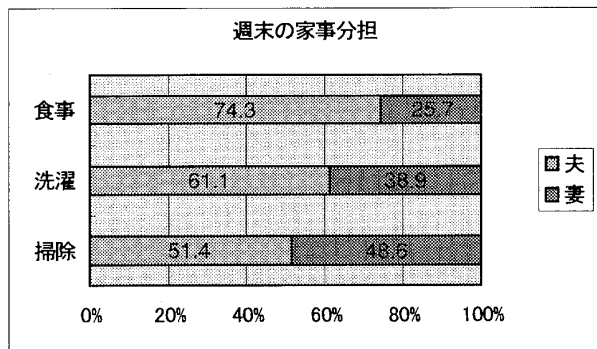


図2 週末の家事分担

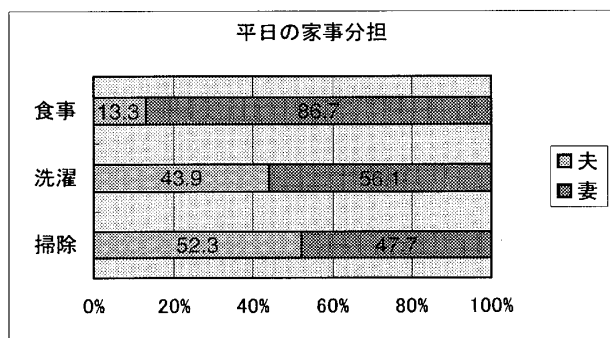


図3 平日の家事分担

③生徒の感想

表3 男子生徒の感想

ジェンダーについて どう思う(授業前)	将来の家事分担を考えた感想 (授業後)
意見なし	手伝いはしなければならない
なくしていくべき	家事をすると自分の時間がなくなる
意見なし	仕事もふまえて平等に分担したい
なくしていくべき	妻のいいなりにはなりたくない
人それぞれだ	家事分担は楽しい
あってもいい	実感がわいた
意見なし	ジェンダーはだめだ
なくしていくべき	夫の方が家事分担が多いなんていやだ
意見なし	家事分担よくできた
しょうがない	良い家族のためには平等が大切
なくしていくべき	仕事とのかねあいで考えたい
なくしていくべき	夫のできる家事も意外とある
意見なし	分担は大事だ
意見なし	夫も少しは手伝わなければならない
なくしていくべき	家事分担は大変だ
意見なし	結婚したくない
なくしていくべき	結婚したくない
なくしていくべき	手伝いをしなければならない

表4 女生徒の感想

ジェンダーについて どう思う(授業前)	将来の家事分担を考えた感想 (授業後)
しょうがない	家事分担楽しい
意見なし	分担を半分にすれば平等なのか疑問
なくしていくべき	もっと夫に家事をしてほしい
なくしていくべき	家事は共にしなければならない
なくしていくべき	家事分担は難しい
ジェンダーはもうない	妻が美しければよりよい家庭になる
なくしていくべき	家事分担は家庭で決める
なくしていくべき	仕事とのかねあいで決める
なくしていくべき	将来は大変だ。
意見なし	半分ずつ分担したので平等
なくしていくべき	夫婦で決める
なくしていくべき	家事分担は楽しい
よくなってるだろう	理想の家庭をつくりたい
なくしていくべき	将来が楽しみ
なくしていくべき	偏りはしょうがない
意見なし	男女共に尊重しあっていきたい
なくしていくべき	夫が家事をやってくれなかった
なくしていくべき	夫の手伝いなしでは妻は大変だ
意見なし	専業主婦にはなりたくない

表3・4はワークシート①から、生徒の感想をまとめたものである。

男子生徒からは、「家事分担を手伝わなけれ

ばならない」「協力しなければならない」「結婚したくない」など家事を自分の仕事とみなさない意見が目立ち、「結婚したくなくなった」というような否定的な意見が多かった。

女生徒からは、家事を自分の仕事であるとみなしているために、「もっと手伝って欲しい(家事)」「夫の家事協力なしでは大変だ」など家事手伝い・家事協力などの表現がみられた。また、「家事分担を楽しめた」という前向きな意見が多かった。

6、大学生の子育て観

子育ては家事の重要な部分であるが、今回は中学生にとっては時期尚早の問題などで、それを省いた。そこで、新たに大学生を対象として子育てについての考え方について調査した。

ところで、日本には3歳児神話という言葉がある。これは、「3歳までの子育ては母親がすべきである」という考え方であり、なんら根拠のない話であるという意味である。現在では、母親が子育てに専念する云々よりも、母子間に築かれた関係の質が大切であり、その為には母親が自分の役割に満足していることが大切であると示唆されている。

1) 調査の内容

宇都宮大学生 350 人を対象に回想調査を行い、幼少期に母親が子育てに専念して育った学生と、そうでなかった学生の、母親の就労状況と子育てへの影響や、母親に対する気持ちを分析した。

2) 結果と考察

① 大学生の子育て観

子どもが0～2歳までの大学生の子育て観は「母親は仕事をせず子育てに専念する」が最も多く54.0%、次いで「夫婦共に仕事を続け、子どもは保育園に預ける」14.0%、「夫婦共に仕事を続け、子どもは祖父母に預ける」7.4%、「父親は仕事をせず子育てに専念する」2.0%であった。

この結果から、大学生には未だ「子育ては女性の仕事である」という考えが強くあることがいえる。(図4)

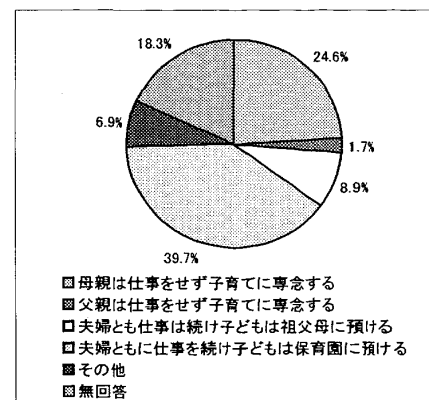


図4 0～2歳子育て観 (n=350)

子どもが3～6歳までの子育て観において最も多かった回答は、「夫婦とも仕事を続け、子どもは保育園に預ける」39.7%、次いで「母親は仕事をせず子育てに専念する」24.6%、「夫婦とも仕事を続け、子どもは祖父母に預ける」8.9%、「父親は仕事をせず子育てに専念する」1.7%であった。この結果から、大学生は、「3歳からは母親が子育てに専念しなくてもよい」と考えるものが多い。(図5)

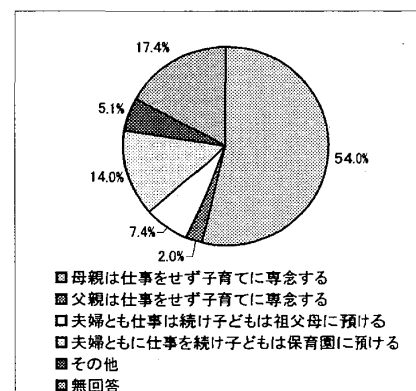


図5 3～6歳子育て観

次に、学生が0～2歳の間の母親の労働形態別(「常勤で働いていた母親」、「パートで働いていた母親」、「家で働いていた母親」、「主婦」)に子育て観についてみた。その結果子どもが0

～2歳までは「母親は仕事をせず子育てに専念する」と回答した割合は、母親が「主婦」だったものが59.5%と一番大きかったのに対して、「母親が常勤で働いていた」ものが41.4%とその割合が18.1%少なくなっている。また、母親の労働形態が家から離れるにしたがって、「母親は仕事をせず子育てに専念する」の割合が小さくなっていることから、母親の労働形態が子どもの子育て観に及ぼす影響は大きいことが予想される。(図6)

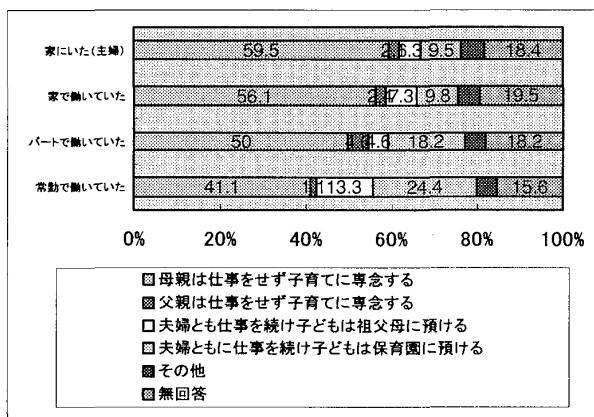


図6 0～2歳子育て観×母親の労働形態 (n=350)

②学生の母親に対する評価

子どもが0～2歳時の母親の労働形態別に、母親に対して「自分の生き方に自信を持っているか」を調査した結果、「常勤で働いていた母親」に対しては44.4%の大学生が「あてはまる」と回答した。次いで「主婦」20.5%、「パートで働いていた」18.2%、「家で働いていた」12.2%という結果となった。

また、「ややあてはまる」も合わせると、常勤で働いていた母親に対して、76.6%と約8割の大学生は「自分の生き方に自信を持っている」と回答し、逆にそれ以外の労働形態においては、母親に対して「自分の生き方に自信を持っている」と感じている子どもは半数以下という結果になった。(図7)

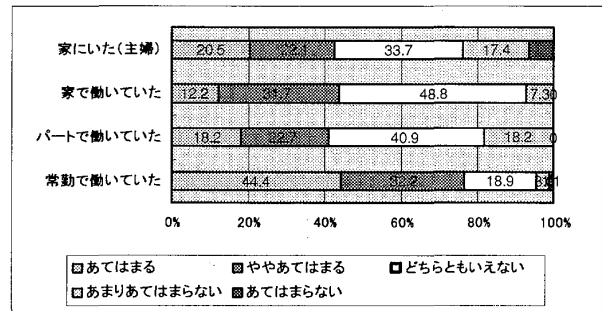


図7 母親の自信に対する大学生の評価 (n=343)

7、男女共同参画社会に向かって

今回の調査から、義務教育という、平等な教育を受けてきた大学生、中学生でさえも、家事分担・子育てに対して、女性がすべきものであるという考えが、根強く残っていることがわかった。この意識が残ったままでは、夫婦が同じ労働条件にあったとしても、女性の家事・子育ての負担が大きくなることは言うまでもない。

男女が豊かに生活していくためには、社会的に文化的に形成されてしまった固定観念を脱し、個人が、自分自身と周りの人々が共に豊かに生活していくためにはどうすればよいのかを考えていくことが必要である。その為、「よりよい生活を主体的に考えることができる」という目標をもつ家庭科教育は、教育においてとても大きな役割を担っていかなければならないと思う。

<参考文献>

- ・ジョン・ボウルビィ「乳幼児の精神衛生」岩崎学術出版 1967
- ・根ヶ山光一・鈴木昌男「子別れの心理学 新しい親子像の提唱」福村出版 1995
- ・内閣府「男女共同参画白書」財務省印刷局 2002
- <参考 URL>
- ・平成17年版「働く女性の実情」
<http://www.mhlw.go.jp/houdou/>
- ・平成17年版 国民生活白書「子育て世代の意識と生活」
<http://www5.cao.go.jp/seikatsu/whitepaper/>